

学級・ホームルーム経営に関する研究

——担任教師に対する生徒の認識を中心として——

新潟県立糸魚川高等学校教諭 藤 田 秀 雄

I 主題設定の理由

文部省の「生徒指導の手びき」では、「学校における生徒の人間形成ないし成長発達には、その大部分が学級やホームルームを場とする生活の中で行なわれる。」といている。すなわち学級やホームルームを場とする学校生活が、いかに生徒指導上たいせつなものであるかが指摘されているのである。

ところが、高等学校では、ややもすれば教科中心の指導を重要視しがちであるために、とくに生徒指導がおろそかにされるような傾向があらわれている。われわれ、現場の教師は、もう少し学級経営のあり方を謙虚に反省し、その人的なまたは物的な条件を醸成整備すると共に、生徒相互および、生徒と担任教師の人間関係の調整と改善をめざす学級経営の充実発展を期さなければならない。

この研究は、名古屋大学教育心理学研究室の研究を参考にして、当校の学級経営の実態を調査し、そこから問題点を握し検討しようとするものである。

II 研究の構想

1 調査の方法

名古屋大学教育心理学研究室作成による調査票（質問紙法）に準拠し実施する。ただし、調査票による調査だけでは実態の理解または問題点の把握が困難な場合、あるいは、調査の内容などに関して必要のある場合には面接調査をも併用する。

2 調査票

調査票は、(1) 学級のふん囲気、(2) 生徒の担任教師に対する態度、(3) 担任教師の人から、(4) 担任教師の指導態度、の4部から構成されており、それぞれについての現実像と理想像とを回答する形式である。調査項目は、それぞれの部に20項目ずつあり、各調査項目は7段階に評定する。（図1～図4参照）

3 調査の対象

学級抽出によって、当校生徒450名（各学年3学級ずつ、各学級とも男女共学）を選定する。ただし、学校行事その他の事情があったので、実際に調査したのは、350名（1年1学級、2年3学級、3年3学級）であった。なお、調査学級を選定する際には、学級経営の差異、担任教師の年齢の違いなども考慮した。これについては、この研究ではふれないことにする。

III 結果と考察

図1 「学級のふん囲気」



図2 「担任の教師に対する態度」

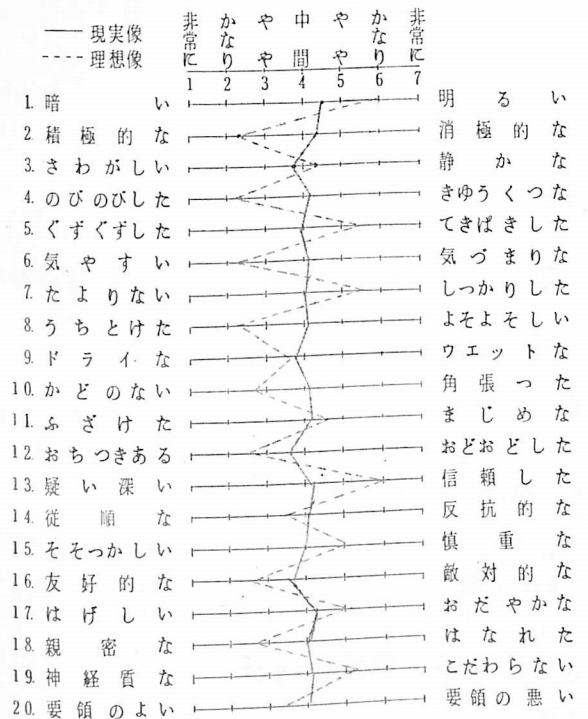


図3 「担任の教師の人から」

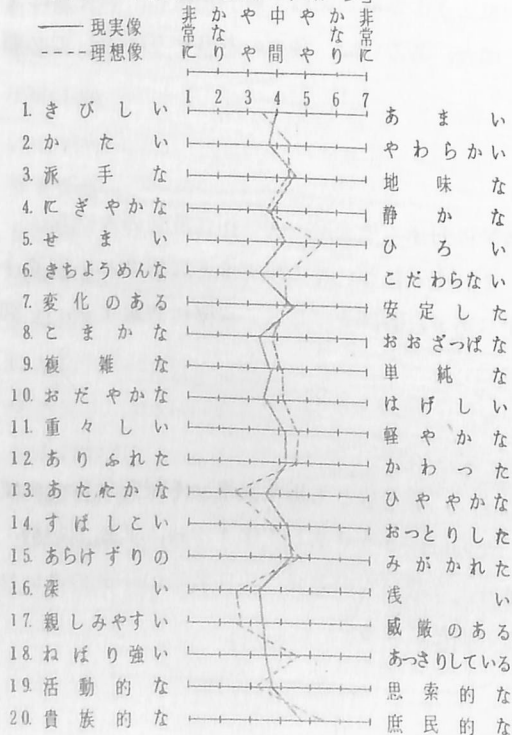
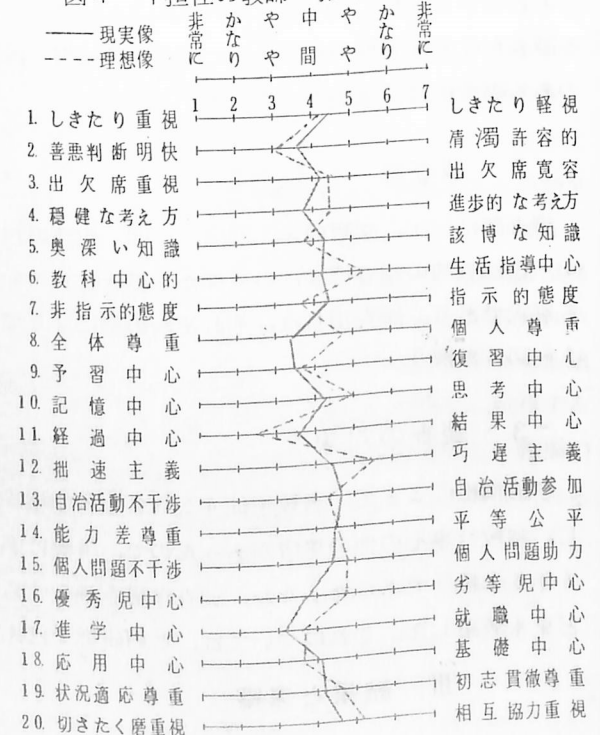


図4 「担任の教師の指導態度」



1 調査の結果

4種類の調査票によって行なった調査の結果を、各種類別にまとめてプロフィールを作成したのが、図1～図4である。また、表1は、各学級ごとの結果の1例を示したものである。

表1 調査Ⅰ「学級のふん囲気」の現実像と理想像の差

(数字は7段階に評定した現実像と理想像の平均値の隔たりを示す。)

クラス	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	平均
a		0.47	0.88	0.10	0.84	0.41	0.36	0.75	0.26	1.82	0.78	1.02	0.23	0.67	0.36	0.20	0.24	0.94	1.25	1.74	2.02	0.77
b		0	0.38	1.07	0.43	0.95	1.14	0.94	0.93	3.91	1.59	0.33	1.26	1.46	1.23	0.11	1.21	1.36	1.24	2.07	0.43	1.10
c		0.43	1.66	1.04	1.83	1.33	0.76	0.32	0.85	1.04	2.65	0.96	1.86	1.46	1.63	0.27	1.50	0.63	1.86	1.96	0.45	1.22
d		0.24	1.52	0.92	0.32	0.22	1.44	0.33	1.03	1.97	2.00	0.02	1.05	1.17	0.88	0.15	1.82	2.18	1.06	1.23	0.05	0.98
e		0.21	1.40	1.12	0.92	0.66	0.07	0.26	0.70	1.24	1.63	0.49	0.98	1.59	1.26	0.29	1.42	0.80	0.52	1.43	0.13	0.86
f		0.18	1.22	0.11	0.74	0.20	0.61	0.43	0.59	1.25	1.18	0.83	0.41	0.28	0.87	0.58	0.17	0.41	0.22	0.97	0.04	0.56
g		0.91	1.25	1.01	0.35	0.83	0.13	0.52	0.36	1.20	1.58	0.42	0.85	1.52	0.95	0.40	0.74	1.14	1.37	2.24	0.84	0.93
平均		0.34	1.19	0.77	0.78	0.66	0.64	0.51	0.69	1.78	1.63	0.58	0.95	1.64	1.26	0.29	1.01	1.07	1.07	1.66	0.57	0.92

[注] クラスのうち、aは1年、b・c・dは2年、e・f・gは3年である。

2 結果の考察

a) 「学級のふん囲気」に関する考察

学級のふん囲気に関する生徒の認識が、現実像と理想像との間にどのような隔たりがあるかを、調査した結果のプロフィールは、図1の示す通りである。図1について比較的ずれの大きい項目を

拾ってみると、「ありふれた — かわった」(2) 「やわらかい — かたい」(3) 「あられずりの — みがきのかかった」(9) 「おだやかな — 活気のある」(10) 「緊張した — なごやかな」(12) 「ゆったりした — きゅうくつな」(13) 「わかわかしい — おとなびた」(14) 「きまじめな — ユーモアのある」(16) 「活動的な — 思索的な」(18) 「協力的な — 競争的な」(19) という諸点において隔たりが大きい。

各尺度に示されていることばの意味を、どのように理解したかは、いちおう、別の問題とすれば、全体的にみて生徒の認識は、現実像では中間の4の左右を小さく出入しているのに反して、理想像においては、ありふれていない、みがきのかかった、活気のある、しかも、なごやかで、きゅうくつでない、わかわかしい、協力的な、学級のふん囲気を望んでいることがわかる。また、各項目について学級別の調査結果は、表1の通りである。この表をみてわかるように、各項目別に数値をみると、学級間の差があまりないのである。それほど極端な差がなく、同じような傾向を示しているということは、担任教師と生徒との人間関係が、どの学級も画一化された経営をしているということになるかと思われる。現実像の曲線が示すように、ありふれた、変わりばえのしないふん囲気、それが高等学校の学級経営の現状であろうかと思われる。調査した本校7学級のうちでは、a、fが比較的生徒の理想に近い経営であった。a学級の担任教師は新卒の若い理科の教師、f学級の担任は学校カウンセラーの1人である。

表2 クラス別調査の現実像と理想像の差

種類	クラス	a	b	c	d	e	f	g	平均
調査Ⅰ		0.77	1.10	1.22	0.98	0.86	0.56	0.93	0.92
調査Ⅱ		0.91	1.49	1.14	1.39	1.21	0.81	1.09	1.18
調査Ⅲ		0.64	1.27	0.16	1.22	1.08	0.53	1.09	0.85
調査Ⅳ		0.64	0.79	0.51	0.94	0.82	0.64	0.75	0.76

b) 「担任教師に対する態度」の考察

担任の教師に対する生徒の態度の、現実像と理想像の調査で、図2から直観的にわかることは、両者の隔たりの大きい項目が多いことである。それに、この調査項目の形容詞の対は、価値的にみて、1つおきに高いものが来るように配置されている。そのためか理想像を示す曲線は左右に大きくゆれる波状を呈したものになった。この図2からみると、生徒は日常担任の教師に対して、中間的な態度で接していることになる。現実像曲線はほとんど4を指している。ところが、理想像は、「積極的に」「のびのびと」「てきぱきと」「気やすく」「しっかりして」「うちとけて」「信頼して」「友好的に」「親密に」担任の教師と接したいということになっている。このような理想を抱いた生徒が、実際にはそのように担任の教師と接触していないということになると、教師と生徒の間に何か意志の疎通をさまたげる原因があるということになるわけである。担任の教師としてはじゅうぶん注意しなければならない。

c) 「担任教師の人から」の考察

図3が調査の結果であるが、全体的にみて現実と理想との差があまりないということである。差の大きいものは「ひろい — せまい」「あたたかな — ひややかな」「あっさりしている — ねばり強い」などである。このことは、生徒は教師に対して、広く深い教養と、人間的なあたたかさを求めているといえよう。表2でわかることだが、c・fの学級では現実と理想の差が少ない。特にcは0.16というわずかな差であるのに反して、b・dの学級では大きな差が出た。全体のプロフィールには学級ごとの微妙な差が相殺されてしまう恐れがあるので注意しなければならない。

d) 「担任教師の指導態度」の考察

この調査で比較的大きなずれを示した項目を拾ってみると、「生活指導中心」「個人尊重」「思考中心」「経過中心」「巧遅主義」「劣等児中心」などであった。この結果をただちに理想的指導態度と見ることではできないまでも、われわれ教師にとって一つの示唆にはなると思う。

なお、学級ホームごとの調査では、表1でもわかるように、各学級間の差はあまり認められなかった。a・c・fが比較的少ない数値を示していた。この調査から考えられることは、全体的にみて、どの学級も同じような指導がなされているということである。

IV む す び

学級経営は、教師と生徒との人間関係、相互関係によって形成されるものである。この両者の関係が、望ましい状態にあるか否かを判定する重要な手がかりは、現実の学級像あるいは教師像が、理想的状态と比較して隔たったものであるかどうかによって、与えられると想定することができるものと思われる。しかし、この調査によってあらわれた理想像をもって、ただちに「望ましいあり方」とであると断定することは許されないが、生徒の立場からという限定のもとで、それはじゅうぶん意味があるし、両者の人間関係の理解とは握には有効な手がかりになりうるものと思われる。

この4種類の調査を通していえることは、教師対生徒の人間関係は、どの学級ホームもだいたい同じような傾向を示したということである。生徒ひとりひとりと教師個人との関係が少ないのではないだろうか。生徒は教師と接する時、教師というイメージと接していて教師個人には接していないようだし、教師自身も教師あるいは生徒というイメージにこだわってはいないだろうか。生徒と教師の関係は固定化したイメージの関係であっては少しも進歩しない。こうしたイメージを破るような人間関係が学校教育相談などを通じて醸成されるならば、案外生徒の描く理想像に近い教育が実現するかもしれない。